

# 子どもたちは前進したか

— 見出しと記事で振り返る大阪ユニセフの20年

「大阪通信」はユニセフと大阪ユニセフ協会（前大阪支部）の活動を伝え続け、80号を迎えました。その間、世界に武力紛争、自然災害、飢餓や貧困、感染症など絶えることなく、その影響を一番に受けたのは子どもたちでした。“声なき声”で訴える子どもたちへの寄せる思いをお読みください。

## 創刊準備1号（2001年1月1日）

21世紀、おめでとうございます 世界の子どもたちに幸せを

## 創刊号（2001年8月10日）

日本ユニセフ協会大阪支部 設立総会は2001年8月1日 日本綿業倶楽部新館7階で開催

## No.4（2001年10月）

「ユニセフの現場に行く 中学3年の砂田明日香さんが見たアフリカ」 アフリカに来て本当に良かったと思う。自分のなかの価値観が驚くほど変わった。私たちは感謝しなければならない。

## No.5（2002年1月）

教育の現場で先行実施される「総合的な学習」時間。ユニセフの活動をテーマに取り組みたいと考えている関係者が多いのではないかと先生方、市民一般向けに、初の公開学習「ユニセフを知ろう」開催

## No.6（2002年4月）

「総合学習支援や会員増へ」 恒例行事化へイベント創設も チャリティバザー、コンサート、ハンド、ユニセフ教室、戦争と子ども展、ユニセフ会員交流会

## No.8（2002年10月）

UNICEFという看板のもと「募金組織」になっている。困難な状況に置かれている子どもたちの

役に立ちたいという多くの市民やボランティアの思いを、募金という行為から地球環境の解決に参画する姿勢へとつなげていくことができていないのではないかと。…南北格差、環境破壊といった地球課題は途上国だけの問題ではなく、豊かさを受けている私たちの生活と深く関わり合っている。（降旗高四郎・評議員）

## No.11（2003年7月）

支部誕生3年 ユニセフ・キッズデー 大阪ドーム9階 バザー会場 品物は前日に2階から9階まで人海作戦で運び上げる チラシ500枚を団地、住宅地にポスティング

## No.13（2004年1月）

「東ティモールヘスタディーツアー参加」 ツアーの目的は、人びとの暮らしのなかで募金がどのように使われているのかをこの目で見て、ユニセフ活動について学習する日本の子どもたちに現地の状況を伝えること。（井上渥子・ボランティア）

## No.16（2004年10月）

「音のない戦争 エイズ孤児80万人」最貧国ザンビアの実情を語る（西本伴子・ザンビアユニセフ事務所）写真①

## No.18（2005年4月）

スマトラ沖地震・津波 対応として支部が丸一となって活動を開始。HPへのアクセスが連日

100件、支部では逐次詳細に現地の状況とユニセフの活動を伝え、緊急募金の呼び掛けをした。義援金が寄せられる。「大阪にユニセフがあったよかった」

## No.20（2005年10月）

支部 アフリカ支援に重点 サハラ以南平均余命急減 写真展「今、アフリカで起きていること」開催

一見小さな支援もそれを受ける人たちの「やる気」を、「背中」を大きな力で押してあげる。アフリカは「暗黒大陸」ではなく「希望に溢れた大陸」（中村裕真・日本ユニセフ協会広報室長）

## No.26（2007年4月）

「存在しない子どもたち」年間1050万人の5歳未満児が死んでいる。存在しない子どもが生まれる原因は「貧困」「紛争」「HIV/エイズ」。貧困下の子どもは保健に、教育に、いろんなものにアクセスできない。出生登録されないためにカウントされない。貧困は格差をより大きくしていく。しかし支援の手は届かない。（平林国彦・ユニセフ東京事務所次席代表）

## No.33（2009年1月）

「インドのような国で、ユニセフの役割はなんだろう」いつも自問している。すべてのインドの子どもたち、とくに社会的に排除されている子ども



たちの「声なき声」の代弁者になるべきである。  
(平林国彦)

#### No. 36 (2009年9月)

「学習協力に参加して」担当のボランティアが先生と相談してテーマを決め、プログラムは自分でつくる。準備段階でかなりの知識、時間、労力を要する。工夫を凝らしながら作るのも結構楽しそう。(ボランティア)

#### No. 37 (2010年1月)

「フィリピン 貧しさゆえに働かざるをえない子どもたち—フィリピンの児童労働を考える」少女ピア セックスワーカーとして働いていた。4歳から路上で働き、8歳児童買春に利用された。十分な教育を受けていないため仕事に付けず貧困へ。児童労働の根本には常に貧困問題がある。(中島早苗・フリーザチルドレン代表)

#### No. 38 (2010年4月)

ハイチ地震 1/12 発生 20万人以上の死亡 2/14 緊急・復興支援の街頭募金 梅田と心斎橋の2箇所実施

ハイチ震災は雨季ハリケーンの時期が迫り、復興は時間との闘い。写真②

#### No. 39 (2010年7月)

「現代アフリカについて」内戦と紛争の過去を乗り越え、順調な経済成長を遂げつつある。グローバル化の潮流 貧富の格差が顕著、MDGsの達成 2015年までは難しい。5歳未満児の乳児死亡率は1000人あたり100人、医療状況の悪いところでは3人に1人が亡くなっている。その状況はもちろん改善されるべきだが、解決によって10年20年後の社会にどういうインパクトを与えるのか、そこまで考えないと責任ある態度とは言えない。(栗本英世・大阪大学)

#### No. 40 (2010年10月)

「マリアア対策蚊帳を開発 2015年アフリカで征圧めざす」タンザニア テロ対策として貧困の解消 その貧困の裏に感染症がある。(伊藤高明・住友化学)

#### No. 41 (2011年1月)

ウガンダからの留学生(あしなが育英会レインボープロジェクト)の本音 孤児を取り残すことなく、一緒に豊かになれる社会を。写真③

#### No. 43 (2011年7月)

日本ユニセフ協会は3月22日から現地地で支援を開始。被災地でのユニセフ支援活動 学校の再開に力を注いだ。

「ユニセフならいつ幼稚園を再開してくれるのか、それだけが知りたい」とストレートに言われ、生活再建の切実さを感じた。(谷口 光・日本ユニセフ協会職員)

#### No. 44 (2011年10月)

東日本大震災へのユニセフに集まった寄付総額は6月末で23億円、緊急支援物資の配布、保健・医療と栄養の支援 ユニセフは市の復興スローガンに協調して、今後子どもたちが前を向いて進んでいけるよう支援をし、失われた人材を補うためにも教育に力を入れる。写真④

#### No. 45 (2012年1月)

「アフリカのとらえ方」アフリカの角(ソマリア、エチオピア、ケニア)では干ばつによる飢饉が深刻。治安状況が悪く、WFP(世界食糧計画)の食糧援助も十分に行き渡らない。40年後(2050年)には世界の人口は100億に達する予測。アフリカの何十年後を語るためには、インフラも大切だが、紛争の元になりかねない住民間の不均衡を軽減する、格差是正のための社会サービス充実も重要。バランス良い組み合わせで支援。(戸井健一・JICA)

#### No. 46 (2012年4月)

「ユニセフを学ぶ意義」相手国の文化や経済、社会の現状を知り、体験して意識を高めてゆくこと。開発教育をお涙頂戴ではなく、自分にかかわりのある視点でとらえてゆかなければならない。(和氣邦夫・元ユニセフ職員)

#### No. 47 (2012年7月)

「変わる世界の流れ 緊急事態の中に立たされ続ける子どもたち」2012年 国連ジュネーブ「子どもたちのための人道支援報告書」を発表。「世界中の何百万人もの子どもたちが何年も続く危機の真ただ中で生きている」と報告。植民地という帝国主義のくびきから解かれても、国民が独裁者からのがれることはできない。政治の犠牲で毎分、毎秒子どもが死んでいる。(古野)日本の飽満の生活のなかで、若い人たちにアフリカの飢餓を実感してくださいと言っても無理だ。まず日本の直近の歴史を勉強して、次に関心をもつ国の歴史を勉強することが、ユニセフのスタートだと思う。(古野)

#### 臨時増刊号 (2013年11月)

フィリピン台風 被害甚大 死者4000人超 すぐに支援の必要な子ども数500万人以上 写真⑤

#### No. 53 (2014年2月)

「国内の子どもの状況」児童養護施設に暮らす子どもの実態 虐待・孤立 子どもの健やかな成長のために、私たちは何を考えるべきか。(山縣文治・関西大学)

#### No. 54 (2014年5月)

「シリア内戦4年 未来の見えない日々続く」後藤健二さん講演会「激戦地アレppoは今」が開催3/4 写真⑥  
「子どもたちの生きづらさと向き合う」「親の親」となる子ども(荏保共子・子どもの里館長)

#### No. 55 (2014年8月)

「学びたい、夢を叶えるために—教育を受ける権利は平等にある」スタートラインから不平等、3つのアルバイト掛け持ち(あしなが育英会奨学金で学ぶ大学生3人)

#### No. 59 (2015年8月)

「語りについていく戦争の悲惨さ」戦争は目の前にあるという認識を持つ(前田真子・ボランティア)

「なぜ国際協力やるのですか？」①日本より途上国のほうが圧倒的に悪い数字が発表されているから ②私たちが日々購入している商品が途上国での児童労働の原因になっているから ③人に優しいことをすると、その人が他の人にも優しくしてくれて、やがて世界中に優しさがひろがっていくから。(山本敏晴・医師)

#### No. 64 (2016年11月)

「南スーダン独立から5年 戦闘ぶたたび、480万人が人道危機に」2013年12月に勃発した内戦は昨年8月に和平合意。2016年4月に暫定政権が樹立。その後紛争勃発。個人の人生というのは必ず前へ進むと思う。アフリカ全体が成長へ向かうなか、南スーダンはいつまでこんな紛争を続けているのか、残念に思う。(幸村真希・ユニセフ職員)

「命とこころ、希望のバトン」「風に立つライオン」のモデルとなった医師 命は神様からの大きなギフト(柴田紘一郎・医師)

#### No. 65 (2017年2月)

「元子どもの兵士、自立への道」自尊心が心の傷を癒す(栗田佳典・テラルネサンス)

#### No. 67 (2017年8月)

「本当に憎いのは戦争そのもの」草の根の活動

が世の中を変える(近藤紘子・立命館大学)

#### No. 68 (2017年11月)

「低価格トイレで途上国の排せ環境を改善」(LIXIL 広報部) 写真⑦

#### No. 70 (2018年5月)

「難民の子どもたちに教育を」トルコに避難したシリア難民350万人 その100万人ほどが就学年齢にある。このままでは失われた世代になる。学校が保護される場でもある。(近藤智春・ユニセフ職員)

#### No. 71 (2018年8月)

「今、「この瞬間」を生きのびる子どもたち」ロヒンギャ難民が暮らすバングラデッシュのキャンプを取材 劣悪な生活水準だがコミュニティはできている 環境は不衛生 深いトラウマを抱える子どもたち70万人 少年泣きながら訴える「悲惨な現実を自分の言葉で伝えたい」という思い(山中章子・アナウンサー)

#### No. 72 (2018年11月)

「SDGsからみた大阪の子ども」(ユニティ報告)

#### No. 73 (2019年2月)

「ルワンダ内戦終結から24年」子どもが笑っていないというのは、レンズを覗いていると良く分かる。子どもたちが本当にいい笑顔を見せてくれた時、「ああ、この国には未来がある」と心底思う。(下村靖樹・カメラマン) 写真⑧

#### No. 75 (2019年8月)

「SDGsと日本の子どもたち」子どもの声を聞くことです。子どもたちは一人でも見捨てない人がいたら、何歳からでも立ち直れます。当てにされると力を発揮します。一人の子どもの問題が、社会全体の課題なのです。ラスト5%の子どもに注目する。そして声を聞く。誰一人取り残さないというSDGsの理念はそこから達成されていきます。(浜田進士・あらんの家ホーム長)

#### No. 78 (2020年6月)

「新型コロナ Covid-19 貧困と飢餓が心配 パキスタン」パキスタンは発展途上国であり、人口の25%が貧困ライン以下で、人々は4~5人の子どもたちの面倒を見ながら毎日賭けのような生活をしています。…人々はCovid-19で死ぬことよりも貧困と飢餓を心配しています。(ファリーフ・ゼーラ)

#### 写真説明

- ① HIV/エイズで瀕死の子(2003年 ザンビア) ©UNICEF-Zambia/Francois d'Elbee/2003
- ② 震災でけがをした少年(2010年 ハイチ) 提供: 国際協力機構
- ③ ウガンダからの留学生ナバノバ・アイリーンさん
- ④ ぬいぐるみで遊ぶ避難所の少女(2011年 日本) ©日本ユニセフ協会/2011N.Imoto
- ⑤ フィリピン・レイテ島で災害を目の当たりにした姉妹(2013年 フィリピン) 提供: JAFS
- ⑥ 激戦地アレppoに残る一家(2014年 シリア) ©INDEPENDENT PRESS
- ⑦ プラスチック製簡易トイレ SATO 提供: LIXIL
- ⑧ 内戦孤児コロンベ(右)(2019年 ルワンダ) 撮影: 下村靖樹

〈表紙写真〉2004年10月、大阪支部でザンビアユニセフ事務所副代表の西本伴子さんによる現地報告会が開かれ、そのときに提供された一枚。ザンビアは現在、農業大国となり、アフリカでもっとも平和な国の一つと言われている。